

# 漢文指導の方法

—— 歴史文学のばあい ——

光 本 光 徳

はじめに

- 一、昨年度の漢文指導の反省と問題点
  - 二、歴史文学指導の目標
  - 三、歴史文学方法の方針
  - 四、個々の教材における指導方法の例
- おわりに

はじめに

昭和36年度の漢文指導を反省してみても、指導者自身まったく五里霧中で過ごしてきたことを痛感した。指導者も生徒も、漢文学習を無意識のうちに敬遠していたのではないか。そのためか、漢文学習に興味を失って脱落していく生徒が出てきた。これは、指導者自身漢文指導の目標を自覚していなかったこと、指導方法の確立なしに無計画に教材を生徒におしつけていたこと、などが原因であろう、

このような反省から、今後要請されるのは常識的ではあるが漢文学習の目標の考察と確立、またその目標達成のための、よりよい指

導方法の確立やその弾力的な実践等である。この漢文指導の基礎的なものが、今まであまり切実な問題として取りあげられ、論議されていないように思う。したがって、ここでは漢文学習の組織的な指導方法、つまり少しでも全体から見通した指導方法を求めようと試みたのである。特にこのたびは歴史文学（史伝類）のばあいについて、その指導方法のおおまかな方針を考えてみた。

## 一、三十六年度の漢文指導の反省と問題点

### ▲表Ⅰ▼

- |   |       |   |
|---|-------|---|
| ① | 対象    | 夙間定時制高校二年一・二組（男女合計62名）  |
| ② | 授業時間  | 週二時間  |
| ③ | 使用教科書 | 「漢文 全」毛利昌編 日興出版社  |
| ④ | 教材    | ○漢詩・絶句・律詩（20篇）<br>古詩（「代丁悲」「白頭翁」・「長恨歌」）<br>○歴史文学 十八史略・史記（「鴻門之会」） |

△表ⅠV アンケート

① この一年間の漢文学習は全体として楽しかったか	楽しかったと回答した者	32名
② 漢文の授業がよく理解できたか	よく理解できた 回答した者	29名
③ 漢文学習を必要だと思うか	必要だと回答した者	28名

標題に「歴史文学」とあるが、主に十八史略・史記の一部を意味している。私は三十六年度はじめて漢文を取り扱ったのであるが、漢文について素養の欠けている者が指導したために、その場かぎりの漢文指導を行なってきたのではないかと思ひ、三月最後の授業時間、生徒にアンケートを取ってみた。回答を要求した項目は、△表ⅠVの三つである。これらは、無記名で書かせたもので、特に問題点としてアンケートの一部分だけ取り上げたものである。なお、三十六年度の漢文指導の対象・時間・教科書・取り扱った教材などは、△表ⅠVに出ている。

① まず、二年間の漢文学習をかえりみて、「楽しくなかった」と回答した者が、62名中30名いた。その理由として、問題になる点を取り上げてみると、「漢字がむずかしく読む気がしない」「漢字ばかりで興味がわかない」などの、漢字・漢文恐怖症——少し誇張したことばだが——にかかったもの、また「なぜ面白くもない漢文を学習するのかわからない」など、漢文学習の必要性に疑問を抱いたものがあつた。特に漢字・漢文を見ただけでうんざりすると言う生徒が多く、これは漢文の指導方法に大きな欠陥があつた結果ではないかと思う。

② 次に漢文学習をふりかえてみて、全体的によく理解できたかという項目に対して、回答者62名中「よく理解できなかった」と答えたもの33名という結果であつた。これは、度々のテストで一応の理解程度の評価は出るのであるが、生徒自体漢文授業をどのように見ていたかを知りたいために出したものである。「よく理解できなかった」と回答した者の中には、「漢字が読めないからわからない」とか、「漢文を読むこともできない」と書いたものが多かつた。これなどは、もっと漢字・漢語の基礎的な指導や訓読指導に視点を向けていたならば、ある程度救うことが可能ではなかつたかと思ふ。真の説解力の養成を考究せず、漢文の説解指導とは一体どのようなものかをも知らずに、ただ語句詞章の表面的な解釈だけで終わっていたようだ。

③ 次に漢字学習の必要性を生徒がどの程度認識しているか、別の問題点も出てくるだろうという観点から調べてみた。その結果は、△表ⅠVの③のとおりである。「必要だ」と答えた者で、その理由を要約すると、一つは「漢字が読めるようになること、漢字を多く覚えること、社会に出ても漢字が役に立つこと」など、漢字の必要性を認めたものである。二つめは「大学入試のために」で4名おり、他に「中国の歴史を知ることができ」「昔の考え方と現代の考え方の比較ができ、将来のことも考えることができる」などであつた。特に漢字の必要性を認めた者が多く、生徒の認識程度がよくわかる。

「必要でない」と答えた者では、「将来何の役に立つのかわからない」というのが圧倒的に多かつた。ほかに、「大学を受験しないから」「中国の歴史など必要でない」などであつた。

以上の回答は漠然としたものだが、漢文学習の目標を生徒がこの一年間の学習を通してどの程度認識し自覚したかの反省にもなると思う。特に漢文学習の必要性を認めない理由とし、社会に出て役立つたないという理解の程度は、漢文だけの問題ではないと思うが、しかし漢文などその傾向がいちばん強いようである。

したがって、このように漢文を敬遠する生徒を、一人でも少なくするために、当然なことではあるが、指導者が漢文指導の目標をまず自覚し確立することに努めること、そしてもっといろいろと指導方法を研究することなどが必要である。漢文学習の、より組織的な指導方法の確立を求めるのは、それ／＼の分野から種々の点が出てくると思うが少しでも全体から見通した体系的な指導方法が求められたなら、漢文指導の偏向、一律化などが救えるのではないかと思う。

このような反省から取り上げてみたのが、歴史文学（史伝類）の指導方法のばあいである。

## 二、歴史文学指導の目標

歴史文学指導の目標を次のように設定してみた。まだ羅列的ではあるが、要請される指導方法の体系的なものを求めるにあたって、当然目標の確立がその前提となるので、こゝにかかげてみることにする。

- ① 漢文学習の初歩的段階として、基礎的な知識をいっそう確かなものにし、積極的に訓読通釈をする態度を身につける。
- ② 初歩的段階として辞書の引き方・参考書の利用の仕方などに慣れる。
- ③ 漢詩学習とちがって、すこし長い漢文の訓読に慣れるように

し、基礎的な語法をいっそう深く理解する。

④ 段落に分けたり、大意をまとめたり、要旨をとらえたりして、事件の推移を正しくつかむようにし、その読解力を深める。

⑤ 有名な故事や成語——現代に生きている故事成語の基づくところを理解する。

⑥ 中国古代の治乱興亡の跡を知ったり、中国古代の政治理想を理解したりする。また、史伝の文章の中からそこに現われた古代の社会相・人間像を通して、人生におけるものの見方、考え方、感じ方などを学ぶ。

⑦ 中国古代の政治や社会など、あるいは登場人物の言動・性格などについて、批判したり感想をまとめたりする。

⑧ 中国の歴史書の特質について理解し、古代中国史のあらましを知る。

## 三、歴史文学指導方法の方針

①にかかげた歴史文学指導目標を達成するために、全体から見通した指導方法が要請されるのであるが、その体系化への足がかりとして、次の十項目を考えてみた。

- ① 漢字・漢語の理解
  - 漢字の構成
  - 熟語の構成
  - 故事成語の意味
  - 語意
  - 漢和辞典の利用
- ② 語法の理解
  - 主語
  - 述語
  - 客語
  - 補語
  - 修飾語
  - 被修飾語

○ 再読文字 置字（訓読で読まない文字）

○ 代名詞・接続詞を表わす文字

（代名詞が文脈上何を指示しているか、接続詞がどんな働きをしているかを把握することは、読解の基礎となる。）

○ 疑問形・反語形・抑揚形・その他の語法

（これらの語法は、語法としてその形だけ指導するのではなく、文脈上でのその働きに注意したい。特に、二重否定・疑問形・反語形・抑揚形などには語勢を読み取り、強調された文意——表現主体の心情や態度など一応読み取ることが必要である。）

③ 表現形式の理解

○ 簡潔な表現

○ 省略

○ 側叙と直叙

○ 会話の妙

○ 対句的表現

○ 比喩的表現

（事件や人物が具体的にいき〜と描写されていることを理解するためにはその表現の特徴をも理解することが当然必要である。）

④ 歴史的背景・社会情勢の理解

○ 年表・地図の利用による、年代や地理のたいたいを理解する

○ 各国の位置・相互関係・社会情勢などの、歴史のあらましを理解する。

⑤ 登場人物の経歴・相互関係の理解

○ 生徒は登場人物が多くなると、その人物の相互関係にはよく混乱する・したがって、登場人物については、その経歴や相互関係を一応しっかり把握させることが、読解の導入学習

として重要である。

⑥ あらすじをつかむ

○ 事件の推移（事件の発端と経過と結末）を正しく把握することは、やはり読解の基礎的な段階となるから、特に書かされた、話させたりして確かめさせる。史記の中の「瀧門之会」などは、特に事件の展開が複雑なので注意したい。

⑦ 段落に分け、各段落の要旨をまとめる

○ 事件の展開を段落ごとにたどり、構成を確かなものにする。

⑧ 主題をつかむ

○ 登場人物の性格について考えてみる。

○ 事件の意味するものを考えてみる。

⑨ 主題の発展

○ 登場人物の行動のしかた、生きかたについて考えたり、批判したりする。

○ 中国古代の社会や政治について考えたり、批判したりする。

（読解の学習の発展で、生徒の自由な感想や批判によって問題解決に役立たせる。）

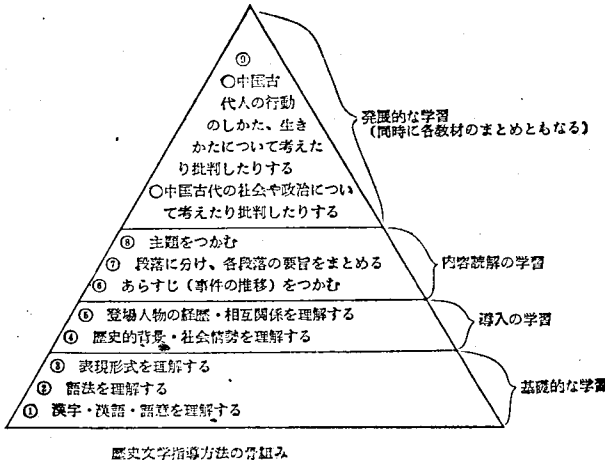
⑩ 中国の歴史書の特徴を話し合う

（これは歴史文学学習の最後のまとめである。）

以上の十項目が、全体から見通した体系的なものに近づけようとする歴史文学指導方法のおおまかな方針である。①・②項は基礎的な学習として、指導の全体を通して常に機能的に指導すべきであ

る。また、③項は叙述の問題として内容の読解とともに注意すべきものである。そして、④・⑥項は導入学習で重点的にふれたい。⑥項以下はこのような順序に固執する必要はないが、有機的に学習を展開させていくのである。

以上の指導方法の骨組みを整理してみたのが、次のA表ⅠVであ



歴史文学指導方法の骨組み

このように一応の骨組み——体系化したものを指導の根幹として用意しておくことは、漢文指導(ここでは歴史文学指導のばあい)の目標達成のために、大切なことではないかと思う。たゞ、誤解してもらいたくないのは、この指導の骨組みはあくまで体系的なものであって、具体的に現場でどのように実践するかは、指導者自身がこれを基礎にして考究しなければならないということである。そのばあい、この体系化したものに必ずよりそうという形で実践の方法を求めるならば、より正しい目標達成を得ることができると思う。

#### 四、個々の教材における指導方法の例

なお、今まで考えてきた指導方法を、個々の教材において実施するばあいの例として、④伯夷・叔齊、⑧蘇秦「妻嫂側目」の二つをあげてみたい。現場で具体的にどのように実践するか、たとえば講義式にするかグループ研究にするかという問題は、ここでは考えないことにする。

次のA表AⅤA表BⅥは、指導者の指導の手びかえとして作製したものである。

注①「留意すべき漢字・漢語」「留意すべき語法」には、基礎的な学習の注意事項を書き入れる。

②「内容理解のための問題」には、指導方法項目④——⑨にあたる指導すべき問題点を書き入れる。

△表④▽伯夷・叔齋（十八史略）

本

文

武王、東觀、兵至於盟津。

諸侯不期而會者八百。

皆曰、「紂可伐矣」。

王不可引婦。

紂不悛。

王乃伐紂、擊西伯木主以行。

伯夷・叔齋叩馬諫曰、

「父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎」。

左右欲兵之。

曰、「義士也。」

扶而去之。

王既滅殷、為天下宗周。

伯夷・叔齋恥之不食周粟。

隱於首陽山、作歌曰、

「登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣。」

留意すべき漢字・漢語

留意すべき語法

内容理解のための問題

○おもな新漢字  
観・会・婦為  
隠・神

○悛（改悛）  
○不可（きかず）  
——きといれ  
ない）

○諫（諫言）  
○孝・仁

○兵（武器で殺す）

○義士

○扶（扶助・扶発）

○宗

○周粟（周の俸祿）

○以暴易暴

○其非

○忽焉（派生語）  
接尾語的な語のついたもの）

○接続詞  
乃（順接）

○反語形  
可謂孝乎  
仁乎

○代名詞  
欲兵之  
去之

○使役形  
去之  
去之

○ラシム之  
去之

○文意・文勢から「シム」となる）

○代名詞  
恥之

△一段要旨▽死を恐れずに、武王に諫言する義人の行為。

○殷の紂王と周の文王、武王との関係についてふれる。太公望についてふれる。

○登場人物を指摘する。その関係について調べらる。

○武王が諸侯の進言を聞かずに帰国した理由。

○武王が紂征伐に西伯（文王）の位牌をのせて行った理由。

○伯夷・叔齋の諫言の根底にあるものは何か。

○太公が二人を助けた理由。

○伯夷・叔齋の行為を中心に、この段の要旨をまとめらる。

△二段要旨▽周に背向し、信念と節義に殉じた二人を描き、二人の心情を歌に託している。

○殷が滅亡して、周の天下となったことを知る。

○二人が周民になることを恥じ、山に隠棲した理由。

○采薇の歌に託されている二人の心情

△表④▽妻嫂側目（十八史略）

神農・虞・夏、忽焉没分。  
我安適婦矣。  
干陟、徂兮命之衰矣。」  
遂餓而死。

○適婦（適  
往く、婦  
婦服する）  
○餓（飢餓・餓  
死）  
○疑問形  
安適婦矣  
（いづくにか  
—せん）  
○感動詞  
干陟

○この段の要旨をまとめる。  
○この話の主題をつかむ。  
△問題の発展▽  
○伯夷・叔斉の行動・生き方について話し合ひ、  
感想をまとめる。  
○武王が紂討伐をした政権争奪の問題について  
（以暴易暴について）

本

文

蘇秦者、師<sub>二</sub>鬼谷先生<sub>一</sub>。

初出遊、困而歸。

妻不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>機、  
嫂不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>炊。

至<sub>レ</sub>是、為<sub>二</sub>從約長<sub>一</sub>、并<sub>二</sub>相六国<sub>一</sub>。

行過<sub>二</sub>洛陽<sub>一</sub>。車騎輻重、擬<sub>二</sub>王者<sub>一</sub>。

昆弟妻嫂、側<sub>レ</sub>目不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>視。

俯伏侍取<sub>レ</sub>食。

蘇秦笑曰、「何<sub>レ</sub>前倨而後恭也。」

嫂曰「見<sub>二</sub>季子位高、金多<sub>一</sub>也。」

秦喟然歎曰、「此一人之身。

高貴則親戚畏<sub>レ</sub>懼<sub>レ</sub>之、

貧賤則輕<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>之。

況衆人乎。

留意すべき漢  
字漢語

留意すべき語法

内容理解のための問題

- おもな新漢字  
（新字体）  
婦 爲 視  
輕 國
- 出遊
- 炊（炊事）
- 從約（合從説  
による同盟）
- 車騎輻重
- 昆弟（兄弟）
- 俯伏（平身低  
頭する）
- 倨
- 恭
- 喟然（派生語）  
富貴・貧賤  
（対立語）
- 畏懼（畏服）  
輕易（輕侮）  
（並列語）
- 衆人
- 不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>視  
（しいては  
しない）
- 疑問形  
何……也
- 接統詞  
則（原因結果）
- 代名詞（之）  
抑揚形  
況……乎  
（いわんや……）

- 戦国時代の国家、社会情勢について、そのあら  
ましにふれる（六国と秦との関係について）
- 蘇秦が從横家であることを知る（從横家につ  
て知る。また、合從説連衡説について知る）
- 貧困であつた蘇秦に対する妻嫂の態度。
- 合從連盟の長となり、六国の宰相となつた蘇秦  
に対する、昆弟妻嫂の取つた態度。（昆弟が加  
わつていることに注意）
- 妻嫂の態度変化の原因、
- 蘇秦が歎いた理由。
- 蘇秦が発憤努力した動機。
- この話の主題をまとめる。（これは、蘇秦が貧  
しい時には家族までも輕蔑し、富貴になると恐  
れ平身低頭するという不人情に失望した話であ  
ることを理解する）

使<sub>レ</sub>我有<sub>二</sub>洛陽負郭田<sub>一</sub>二頃、  
豈能佩<sub>二</sub>六国相印<sub>一</sub>乎。」

於<sub>レ</sub>是、散<sub>二</sub>千金<sub>一</sub>以賜<sub>二</sub>宗族朋友<sub>一</sub>。

○宗族(宗本家、  
族一分家)  
○朋友(朋一同  
じ師に学んだ  
友、友一志を  
同じくする  
友)

んやーまし  
て……なおさ  
らのことであ  
る)  
○使役形  
○反語形  
豈……乎  
(あに……ん  
やーどうし  
て……できよ  
か)

△問題の発展▽  
○蘇秦が歎いた問題や発憤した動機のことについ  
て、感想をまとめ、話し合う)

次に生徒に学習の参考として与えるプリントの例としては、△表  
◎▽にある「吳越興亡一臥薪嘗胆」のばあいをあげてみたい。

注○本文は、①人名・国名・地名を明確にする、②主語を明確にす  
る、③特に注意したい語法を明確にする、④対句などの表現を  
わかりやすくする、⑤段落がわかるようにし、文脈をわかりや

すくする、などの理由から書き変えてみた。  
○「注意したい漢字・漢語・語意」には、語釈や新漢字や特に注意  
したい漢字・漢語を書き入れる。

○「問題」の欄には、導入の問題や各段落ごとの問題、まとめや発  
展の問題を書き入れ、学習の展開を示し、学習しやすくする。



本 文

吳王 闔廬 拳 伍員 謀 国事。

（伍員）字 子胥、楚人 伍奢 之子。

奢誅而（子胥）奔吳、以吳兵、入郢。

吳伐越。

闔廬 傷而死。

子 夫差 立。子胥 復事（之）。

夫差 志復讎、朝夕臥薪中、出入使人呼、曰、「夫差、而忘越人之殺而父耶」。

周 敬王 時、夫差 敗越于夫椒。

越王 勾踐 以餘兵、棲會稽山、

請為臣、妻為妾。

子胥 言、「不可。」

太宰 伯嚭 受越賂、說夫差 赦越。

語法注意したい漢字。漢語。語意 注意したい語法

問 題

○拳（ ）

○謀（ラム）

○国（ ）

○国事（国の政治）

○誅（殺される）

○奔（奔走）

○而（汝）

○復讎（復讐）

○事（つかふ）

○臥薪中（臥薪）

○會（ ）

○餘兵（残った兵）

○請（降伏を許し、命を助け）

○不可（承知できない）

○賂（まひらひ）

○赦（恩赦）

○当時の歴史のあらましを調べよう。

○吳・越の關係について調べよう。

○登場人物をすべてあげてみよう。

○子胥の経歴はどうか（闔廬・伍奢・子胥の關係も）

○闔廬の死後王位についたのはだれか。

○夫差は復しゅう心を起こすためにどんなことをしたか。

○この段の話の要点をまとめよう。

○「臥薪」の意味するものは何か。

○敗北した勾踐は、どのようなことをしたか。

○勾踐の降伏に対して、子胥の取った態度はどうか。

○宰相の伯嚭は、勾踐に対してどのようなしたか。

○この段の話の要点をまとめよう。

勾踐 反国、懸<sub>レ</sub>勝於坐臥、即仰胆管<sub>レ</sub>之。

曰、「女忘<sub>レ</sub>会稽<sub>レ</sub>之恥耶。」

拳<sub>レ</sub>国政<sub>レ</sub>属<sub>レ</sub>大夫<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>、

而興<sub>レ</sub>范蠡<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>兵事<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>呉。

太宰 軒<sub>レ</sub>譖<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>子胥 恥<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>不用<sub>レ</sub>怨望<sub>上</sub>。

夫差 乃賜<sub>レ</sub>子胥 属<sub>レ</sub>鏹<sub>レ</sub>之劍。

子胥 告<sub>レ</sub>其家人<sub>レ</sub>曰、

「必樹<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>墓<sub>レ</sub>檀<sub>レ</sub>、檀<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>材也。

扶<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>東門<sub>レ</sub>、

以<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>兵<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>呉。

乃<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>刳<sub>レ</sub>。

夫差 取<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>尸<sub>レ</sub>、盛<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>鴟<sub>レ</sub>夷<sub>レ</sub>。投<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub>。

呉人<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、立<sub>レ</sub>祠<sub>レ</sub>江<sub>上</sub>、命<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>胥<sub>レ</sub>山。

越、十年生聚、十年教訓。

周元王 四年、越伐<sub>レ</sub>呉。

呉三戰<sub>レ</sub>三北。

○勝<sub>レ</sub> ( )

○興<sub>レ</sub> ( )

○女<sub>レ</sub> (女) (女) (女) (女)

○坐臥<sub>レ</sub> (寝起きするところ)

○会稽<sub>レ</sub> (恥)

○事<sub>レ</sub> (呉討伐計画)

○觀<sub>レ</sub> ( )

○譖<sub>レ</sub> (中傷する)

○謀<sub>レ</sub> (越を計つことの計画)

○賜<sub>レ</sub> (劍を与えて、これで死ねと命ずる)

○檀<sub>レ</sub> (棺を作る木材)

○東門<sub>レ</sub> (城の東門は越の方に向いている)

○自刳<sub>レ</sub> ( )

○其尸<sub>レ</sub> (子胥の死体)

○戰<sub>レ</sub> ( )

○生聚<sub>レ</sub> (生民を生育する)

○聚<sub>レ</sub> (財貨を集める)

○代名詞 (之) (之) (之) (之)

○ (女) (女) (女) (女)

○而<sub>レ</sub> (置字のばあいとくらべて)

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○代名詞 扱<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub> 江

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○ ( ) ( ) ( ) ( )

○自国に帰った勾踐は、どんなことをしているか。

○「仰<sub>レ</sub>胆管<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>」は、勾踐のどんな様子を表わしているか。

○この段の話の要点をまとめよう。

○「会稽の恥」の意味はどうか。

○「事<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>」の意味はどうか。

○「代名詞」は、どのように子胥を中傷しているか

○子胥は、中傷によってどのように処理されたか

○子胥のことはどんな気持がうかがわれるか

○この段の話の要点をまとめよう。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○敗北した夫差は、どのような行動を取っているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

○「吾無……子胥」には、夫差のどんな気持がこめられているか。

夫差 上<sub>レ</sub>姑蘇、亦謂<sub>二</sub>成於越<sub>一</sub>。

范蠡 不<sub>レ</sub>可。

夫差 曰、「吾無<sub>レ</sub>以見<sub>二</sub>子胥<sub>一</sub>。」

為<sub>二</sub>輒冒、刃死<sub>一</sub>。

△注▽ □ 人名 — 国名・地名

— 接続詞 ○ 代名詞

— 語法

○ 教訓(單事訓 練)

○ 北(敗北する)

○ 成(和平)

○ 輒冒(顔をつ つむぎれ)

○ 吾無……子胥 (自分はあの世で子胥に合 わせる顔がな い)

○ 輒冒で顔をかきして自殺したのはどうしてか。  
○ この段の話の要点をまとめよう。

△まとめ▽  
○ 呉越興亡のあとをまとめよう。  
○ 越王勾踐が呉王夫差をついに敗北させた原因について考えよう。

○ 夫差・勾踐・子胥・伯嚭・范蠡など、登場人物の行動や性格について感想をまとめよう。

○ 「臥薪嘗胆」「会稽の恥」の意味

こういう表を準備しておけば、基礎的な学習を忘れることもなく、家庭学習の参考にもなるし、分担研究にも比較的参考なるし、体系的な指導方法に沿って、柔軟な指導が可能になるのではないかと  
と思う。

おわりに

以上はまだ不明確な点がたくさんあると思うが、できるだけ効果的な漢文指導を行なうためにと考えて、まず歴史文学指導のばあいについてその指導方法の体系的なものを求めたものである。漢文の素養のない国語教師が漢文を教えること自体矛盾した話であるが、しかし漢文指導を敬遠するわけにはいかない。これからの漢文教育は、たゞ教材研究のみに終らずに、もっと積極的に体系的な指導方法、あるいは実践的で具体的な指導方法が求められなければならない

と思う。その意味でまず一歩から踏みだすべきであろう。来年度から新教育課程によることになると、これらの基本的な研究や具体的な実践方法の工夫がいっそう要求されるようになってくるであろう。

付 表④⑤◎の本文は、①漢文全 (毛利昌編) ②漢文新編上巻

(塩谷温監修) ③十八史略評解(中西清著 有精堂)に従って

いる。なお、個々の本文そのものをどのように設定するかという教材説定や教材観の問題はここでは省略して考慮に入れていない。現行の教科書を調査してみても、同じ内容の教材でも編者の意図により、省略されたり整理されたりして、本文が多少相違しているばあいがある。この問題については、また別途に考察してみなければならぬと思う。

(昭和37年8月26日稿) (広島県立呉三津田高校教諭)